

Title	意味とコミュニケーション：ルーマンのシステム理論的アプローチ
Sub Title	Meaning and communication : Luhmann's systemtheoretical approach
Author	菅野, 博史(Kanno, Hiroshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1992
Jtitle	哲學 No.93 (1992. 1) ,p.223- 248
JaLC DOI	
Abstract	The basic concept of sociology has been regarded as "action". This kind of thought, has long theoretical accumulations after Max Weber and holds a central position in social theory. Against this tradition, however, Niklas Luhmann suggests that the concept of meaning should be basic. According to him, meaning is more suitable to describe the contingent possibility of the "world". And he introduces phenomenological insights into his framework of system theory, building it up into the theory of autopoietic systems of communications. In this paper, the author tries to summerize his discussions on meaning and communication in the first place, and examines his most important conception like self-reference (Selbstreferenz) and self-observation (Selbstbeobachtung) in the next. In conclusion, the author (1) critisizes the ambiguity of his concept "self-reference" and (2) points out theoretically fruitful possibilities of observing self-observational systems which always deparadoxize its own paradoxes.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000093-0223

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

意味とコミュニケーション

——ルーマンのシステム理論的アプローチ——

菅 野 博 史*

Meaning and Communication

—Luhmann's systemtheoretical approach—

Hiroshi Kanno

The basic concept of sociology has been regarded as “action”. This kind of thought, has long theoretical accumulations after Max Weber and holds a central position in social theory.

Against this tradition, however, Niklas Luhmann suggests that the concept of meaning should be basic. According to him, meaning is more suitable to describe the contingent possibility of the “world”. And he introduces phenomenological insights into his framework of system theory, building it up into the theory of autopoietic systems of communications.

In this paper, the author tries to summarize his discussions on meaning and communication in the first place, and examines his most important conception like self-reference (Selbstreferenz) and self-observation (Selbstbeobachtung) in the next.

In conclusion, the author ① criticizes the ambiguity of his concept “self-reference” and ② points out theoretically fruitful possibilities of observing self-observational systems which always deparadoxize its own paradoxes.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程 (社会学)

0. はじめに
1. 意味という現象
2. ダブル・コンティンジェンシー
3. 出来事としてのコミュニケーション
4. コミュニケーションのオートポイエシス・システム
5. 行為の接続と構造
6. 基礎概念の検討

0. はじめに

ニクラス・ルーマン (1927-) は、現在のドイツを代表する社会学者の一人であり、特にハーバーマスの論争 (→Habermas & Luhmann [1971]) 以降、その独自のシステム理論によって多くの人々の注目を集めている理論家である。彼は自らの理論を社会システムの一般理論と名づけ、その普遍性要求を掲げており、社会学の対象領域すべてを包摂する理論の構築を目指している。そのため、彼の理論の対象は、法、経済、政治、家族、科学、教育、芸術等々と多岐にわたることになるが、それを取り扱うにあたっては、一貫してシステム/環境-図式に基づくシステム理論的なアプローチを採用している。

ルーマンのシステム理論において最も特徴的なことは、社会システムの基礎に意味という概念を据えていることである。多くのシステム理論は、いままで社会分析の最小の単位として、行為という概念を用いてきた。また、システム理論に限らず、従来社会学は社会分析の基礎概念の位置に行為概念をあててきたのである。それゆえ、旧来の理論を批判し、独自の社会(学)理論を打ち立てようとする試みには、つねに行為概念の見直しが伴ってきたと言うことができる⁽¹⁾。ルーマンは、システム理論に現象学的な知見を盛り込むとともに、コミュニケーション概念を刷新することで、行為概念に代わる新たな社会学の基礎概念として、意味という概念を提示

するのである。

ところが、ルーマンの理論を体系的に理解しようとするとき、ある判りずらさの感覚に襲われることもまた事実である。この感覚を生み出す原因は、ルーマン理論の特色をなす以下のことに由来している。第一に、多様な思想的源泉から取り出してきた概念を換骨奪胎して用いていること。第二に、旧来の思考法の枠内では理解しきれない、新奇な概念を駆使していること。第三に、ルーマン自身の理論がかなり大きく変化（進化？）していること。第四に、ある主題に対して相互関係が必ずしもはっきりしない様々なアプローチが繰り出されること。

こうした点から外在的にルーマン理論を批判していくことは容易であろう。しかし、そういった批判の多くは、自らの理論の正当性の確認という機能を果たす以上のものでも以下のものでもない。この論文が目指しているのは、むしろ徹底的にルーマン理論に内在することで、ルーマン理論を難解にしている原因を見極め、それを取り除いていくことのうちにある。つまり、ルーマン理論の迷路に自ら入り込み、その中を彷徨することのなかから、ルーマン理論の基礎をなすコミュニケーションと意味についての議論を一つの像に再構成し、その基本となる考え方に検討を加えることがここではもっぱら問題となるのである。

1. 意味という現象

意味を現象学的に解釈すること。これがルーマンの議論の出発点である。「意味現象は、更なる体験や行為の可能性の指示の過剰という形式において現れる。つまり、或るものには視線が注がれ、それが志向性の中心に置かれるのに対して、他のものはその他もろもろ (Und-so-weiter) の体験や行為のための地平として付随的に示唆される」(Luhmann [1984: 93])⁽²⁾のである。あるいは、このことを次のように言い換えることもできる。「意味は、それぞれ顕在的に生起する体験や行為に重複的な可能性を付与する

ものである」(SS. 94), と. ここでルーマンが現象学的な言い回しを使って述べていることは, いたって単純な事態である. 具体的な例を使って考えれば判りやすい. 例えば, 道端で見覚えのない女性に声を掛けられたとする. これはアンケートや勧誘の意味をもった行為としてまずは理解できる. しかし, 話しているうちに彼女が知り合いであることに気がついたとすれば, 彼女の行為は挨拶であったということになる. これをルーマンの用いた語彙を使って説明すれば, 勧誘という行為には挨拶という行為が可能性の地平として重複的に含まれていたということになるのである.

ルーマンはこうした状況を意味のもつ顕在性と可能性(潜在性)の差異によって説明する. ルーマンによれば, 顕在的な意味は常に他の可能性に開かれているのである. これは, 顕在的な意味は常に否定可能な形で与えられているということでもある. あるいは, 「常に一現在のな体験に付随する, 今のところは顕在化していない潜在性の世界の構成は, 人間に特有な否定の能力に依拠している」(Habermas & Luhmann [1971: 35]) と言うこともできよう.

ここで重要なのは, 意味の否定は一時的なものであり, 否定された意味は否定の否定という操作によって取り戻すことが可能である, という否定のもつ性質に注意を払うことである. このことから, 「否定とは破壊ではなく, 意味保持の一様式」(Luhmann [1981: 38]) だということが明らかになる. ところが, 記号の混乱から生じる「意味喪失」, 例えば「東京は鼻がころんだ」といった文章では, それをいくら否定しても何ら意味の潜在化が起こることもなく, 否定された意味を取り戻すといったことも考えられない. 「非意味 (Unsinn) は生産可能ではあるが, 否定可能ではない」[同: 35] のである. 従って, 意味をいくら否定しても非意味へと至ることはなく, その限りで意味を越える審級へと辿り着くことはできない. ルーマンの理論では, 意味それ自体は, 「否定することのできない, 差異を欠いたカテゴリー」(SS. 96) なのであり, 意味は外部を欠いた「世界」の中で生起

するのである (→Luhmann [1970: 115]).

このように、顕在的な意味が常に否定可能であるならば、意味は本質的に非常に不安定なものとなる。そのために必要とされる「意味に特有な、自身の不安定性を緩和し処理する戦略は、接続する情報処理のために差異を利用すること」(SS. 100) の内に見いだされる。換言すれば、「意味処理過程は、顕在性と潜在性という意味一構成的な差異を絶えず新たに定式化すること」(SS. 100) の内に求められるのである。つまり、意味の顕在化はその後接続可能な可能性の潜勢化 (virtualisierung) をも常に引き起こすことから、意味を時間的な前—後関係における接続可能な可能性の顕在化の過程として扱うのである。このように、潜在的な意味の可能性を接続可能な意味として潜勢化し、その可能性の中から次の意味が顕在化されるという過程の中で、意味の安定化は得られることになる。意味とはこうして、「自己推進的な過程としての、顕在化と潜勢化、再—顕在化と再—潜勢化の統一」(SS. 100) だということになる。ルーマンに従えば、意味の生起はいわば自己運動を行うのであり、「意味が自分自身の再生産を自己準拠的に可能にする限りで、意味は自分自身を担うことになる」(SS. 141) のである。

ルーマンの意味概念の根底にあるのは、意味は「その都度他の意味を指示することを通じてのみ、実際の現実性を獲得することができる」(SS. 95) という認識である。しかしながら、「すべての意味志向は、それ自身が再び顕在化する可能性を同時に考慮に入れるとき、すなわちその指示構造において自分自身を更なる体験と行為の多くの可能性の内の一つとして再び受け入れるときに、自己準拠的なもの」(SS. 95) になる。ちょうど、「この薔薇は薔薇である、は薔薇である、は薔薇である」、といった文章のように。ここでは意味が自己充足し、トートロジーに陥るがゆえに、非生産的なものしか生じない。それゆえ、「すべての意味に普遍的な自己準拠、つまりすべての意味体験が自身を更なるもの (Darüberhinaus) の内に投影し、

そこで再び見いだされるというような自己準拠は、意味の次元の分化によって特定化され」(SS. 130) なければならない。この意味の次元の分化は、同時に意味の自己準拠をトートロジーから解き放つ脱トートロジー化への第一歩である。そこで意味的分化の三つの次元、すなわち事物的、時間的、社会的次元についてのルーマンの説明を簡単に見ておこう。

- ① 事物的次元は、意味の指示構造が「このもの」と「その他のもの」に分解されることによって構成される。さらにこの区別から「内部」と「外部」という差異が構成されることになる。
- ② 時間的次元は、すべての出来事において直接的に体験可能な前と後との区別が、過去と未来という地平の差異を構成することによって生じる。また、現在における持続と変化の差異から可逆性/不可逆性という差異も派生する。
- ③ 社会的次元は、自我と他我の区別から、自我のパースペクティブと他我のパースペクティブの差異が構成されることによって生じる。この次元で問題となるのは、合意/不合意の差異である。

これらの次元のうち、社会的次元が我々の考察にとって、特別に重要な意味をもつ。というのもダブル・コンティンジェンシー問題が、この次元に起因するからである。そしてルーマンの理論構成においては、この問題が組み込まれることで、初めて意味の理論とコミュニケーションの理論が統一的に構築されることになるのである。

2. ダブル・コンティンジェンシー

ダブルコンティンジェンシーとは、周知の通りパーソンズ概念である。パーソンズによれば (Parsons & Shils [1951: 16]), 相互行為場面において、自己の欲求充足は他者の選択する行為を条件として (contingent) 成立する。他方、他者の側でも、可能な選択肢から選択を行うには、自己の側がどのような選択を行うのかを条件としている。この状況では、自己と

他者は相互依存の関係にあり、お互いに睨み合いを続けることはできても、最終的に何らかの行為を選択することはできない。なぜなら、何らかの行為をどちらかの側が選択するには、それに先行する行為の選択が必要となり、その先行する行為自体においても、さらにそれに先行する行為の選択が必要となり……、という具合に無限後退に陥ってしまうからである。

パーソンズは、こうした状況に対して、自己と他者の双方が共有する価値を内面化し、サンクション・メカニズムをはたらかせることで、行為の選択が可能になるという規範主義的な解決策を提示した。これは、共有されたシンボル体系に秩序化の作用を還元することを意味している。しかし、ルーマンによれば、パーソンズのように「常に新たな社会秩序を可能にする長期的構造は、文化の継承のうちに、従って過去のうちに存する」(SS. 150) と見なすような今世紀前半に特有の考え方は、社会秩序の問題を政治的支配の問題としてではなく、社会化の問題として捉えることで、社会システムの構成を常に既に存在する文化的コードに結びつけて理解するようなものになる。そしてその時には、社会文化的な進化が逸脱した社会化として概念化されてしまうととも、文化的コード自体の成立と機能とを説明することができなくなってしまうのである。

そこでルーマンは、コンティンジェンシー (contingency, Kontingenzt) 概念をパーソンズとは違った形で解釈することから、彼独自のダブル・コンティンジェンシー概念を構築する。ルーマンに従えば、パーソンズの議論は、「コンティンジェンシーの代わりに依存性 (dependency) を用い、「依存性」を目的の実現のための手段への依存として解釈することで再構成できる」(Luhmann [1976: 508]) ようなものでしかない。しかしながら、ルーマンによると、コンティンジェンシーには、本来、「存在は、存在しない可能性と他の可能性の存在とを含む選択に左右されるものである」[同: 509] といった意味が含まれている。こうした考え方に従うとき、ある行為の意味は、その選択の際に、可能性に留まっていた他の意味の可能性の中

から選択されたものとして見られたとき、コンティンジェントなものとなる。このようにコンティンジェンシー概念の様相論理的な含意を前面に押し出すとき、「コンティンジェンシーとは、必然的でも、不可能でもないことである。即ち、物事はいまある（あった、ありうる）ようであることもできるが、他でもありうるのだ」(SS. 152) という理解に至ることになる。

コンティンジェンシー概念をこのように解釈するとき、ダブル・コンティンジェンシーとは、「否定の可能性が、相互に、顕在化されてはいないが含意されている可能性として維持され、安定化されうるということを意味する、「潜在的二重否定」(double négation virtuelle)」(Luhmann [1976: 509]) の状態を指示する概念になる。すなわち、ある行為の意味は、その否定可能性を否定するという二重否定を潜在的に伴うことによって成立するのであるが、同時に他の可能性にも開かれているのである。このことは、自我が他者を他我として、即ち自分とは異なったパースペクティブをもつ主体として経験する事実に由来している。つまり、ダブル・コンティンジェンシー状態では、パースペクティブの差異から生じる否定作用を通じて他の可能性へと至る道が用意されるのである。さらに、「自我が他者を他我として体験し、こういった体験の文脈の内で行為するときには、自我が自分の行為に付与するすべての規定は自分自身に跳ね返ってくる」(SS. 182) ことになる。換言すれば、自我の行為は他者を媒介として初めて規定されることになる。この自我の行為が他者のパースペクティブを通じて自己自身のものとして規定される関係を、ルーマンは、基底的自己準拠 (basale Selbstreferenz) と呼ぶ。ルーマンによれば、ここで準拠する「自己」にあたるものは、意味の確定された「行為」である。「基底的自己準拠は、このようにして、行為を初めて構成する意味規定過程へと常に既に組み込まれる」(SS. 182) ことになるのである。

しかしながら、「自我はパースペクティブの非同一性と同時に、両者の側における経験の同一性をも経験している」(SS. 172) のであり、「この経

験において、パースペクティブが収斂し、こういった否定性の否定への関心、規定への関心を仮定することが可能になる」(SS. 172) のでなければならぬ。つまり、自我と他我がダブル・コンティンジェンシーを経験するにも関わらず社会システムが構築されることで、そのような状況のもつ非規定性に定まった意味が付与されねばならない。ルーマンによれば、ダブル・コンティンジェンシーは、構造の構築のための自己触媒の役割を果たしている。すなわち、ダブル・コンティンジェンシーという問題は、「自身を消耗することなく、複数のパースペクティブに向けた一つのパースペクティブを通じて規制される、新たな秩序の次元での構造の構築を可能にする」(SS. 170) のである。言わば、ダブル・コンティンジェンシー自体がシステムの構成要素となって初めてシステムが機能するのである。だが、これは一体どういうことなのだろうか？。その回答を得るためにも、我々はルーマンのコミュニケーション概念を検討しておかなければならない。

3. 出来事としてのコミュニケーション

コミュニケーションは、選択的なできごと (Geschehen) である。これがルーマンのコミュニケーション概念を支える認識である。「コミュニケーションは、それ自身によって初めて構成される顕在的な指示の地平から**あるもの**を選び出し、**他のもの**はわきに置く」(SS. 194) ことに基づくのである。このとき、コミュニケーションを通じて実現される選択は、それ自身の地平をも構成する。言い換えるならば、伝達される主題の範囲が地平として既に選択され、その中から**あるもの**が選択されるという二重の選択が生じるのである。そして、この選択される**あるもの**をルーマンは情報と呼ぶのである。したがって、情報は「可能性のレパートリーからの選択」(SS. 195) として定義される。また、コミュニケーションを成立させるためには、情報に加えて、情報を伝達するための態度も選択されなければならない。これは、典型的には発話に伴う態度の選択である。これを情報と区

別してルーマンは伝達 (Mitteilung)⁽³⁾ と名づけている。ルーマンによれば、コミュニケーション概念を理解するにあたって最も重要なことは、この情報と伝達概念を区別することなのである。

さらに、ルーマンにおいては、情報概念は意味概念と区別されなければならない。そこでルーマンの情報概念に特有な性質を見ておこう。まず、情報とはシステム状況を選択するような出来事 (Ereignis) である (SS. 68)。あるいは、これを情報には驚きが伴わなければならないということもできる (SS. 390)。次に、この出来事は一つの時点に固定された要素であり、瞬時にして消え去ってしまう一度限りの現象でしかない。換言すれば、「出来事は時間的な生起を通じて同定される、反復不可能」(SS. 102) なののである。こういった情報の性質に従えば、反復された情報は有意味ではあるが、もはや情報ではないことになる。それは、「反復において意味を保持するが、情報価値を失う」(SS. 102) のである。例えば、朝起きてすぐに何気なく目を落とした新聞で、株が暴落したという記事を読んだとしよう。これは、システム状況を変化されるような出来事、つまり情報である。しかし、その直後に、同じ内容のニュースがテレビで流れるのを見たとしても、それはもはや情報価値をもたない。ルーマンの定義に従えば、すべての情報は意味を持つが、すべての意味に情報価値があるとは限らないのである。

コミュニケーションを説明するにあたって、ルーマンは、通常とは異なり、コミュニケーションの受け手の側を自己、送り手の側を他者と規定する。このダブル・コンティンジェンシーを生み出す状況において、コミュニケーションは、情報と伝達の差異が自己によって観察され、要求され、理解され、それに接続される態度の選択の基礎に置かれるときに、成立するものとされる。つまり、「情報的な出来事の単なる認識と異なって、コミュニケーションは、自己が二つの選択 (= 情報と伝達) を区別し、この差異を彼の側で扱いうることによってのみ成立する」〔カッコ内：引用者〕

(SS. 198) のである。つまりこの差異は、自己の側が、伝達行為とそれが伝達したもの、即ち情報を区別しうる状況にあるときに、自己による他者の観察を通じて見いだされるのである。この意味で、「コミュニケーションは言わば後ろから、過程の時間流とは逆方向に、可能となる」(SS. 198) のである。

このコミュニケーションに独特の時間構造は、理解という現象において最もよく現れる。あるコミュニケーションが理解されたかどうかは、さらなるコミュニケーションのうちで初めて明らかなものとなるからである。すなわち、「コミュニケーション的行為に更なるコミュニケーション的行為が接続するとき、そこで先行するコミュニケーションが理解されたかどうかを検証される」(SS. 198) のである。もし、検証の結果が否定的なものとなったときには、コミュニケーションに対する反射的 (reflektiv) なコミュニケーション (=コミュニケーションについてのコミュニケーション) がしばしば生じる。このことから言えることは、あらゆる場合において、個々のコミュニケーションは更なるコミュニケーションでの理解の可能性のうちで再帰的に確保されるということである。ルーマンは、同一過程の要素との連関を含み込むことによって、自分自身に言及するような出来事からなる過程を基底的自己準拠と呼んでいる (SS. 199)。具体的に言えば、コミュニケーションは更なるコミュニケーションを通じてのみ成立すること、これが基底的自己準拠であり、その場合の「自己」に当たるものは出来事としてのコミュニケーションなのである (SS. 600)。

以上で述べてきたことを、例を使って説明しよう。いま A, B という二人の男女の間で次のような会話が交わされたとする。

A (明らかに表情を曇らせながら)「君って煙草を吸うんだ。」

B (驚いた顔つきで)「あら、いけないかしら。」

この会話で、A の発言の前に、B が煙草を吸い始めたことは明らかである。A は今まで B が煙草を吸わないものと予期しており、この「B が煙

草を吸う」ということに情報としての価値を見いだしている。また、A は B がおそらく意図していないにもかかわらず、B の喫煙を伝達の振る舞いとして解釈している。そこで、A は「君って煙草を吸うんだ。」という発話を行ったのである。これに対して B は、女性が煙草を吸うことぐらいで A は眉をひそめるような男性ではないと予期していたため、「A は煙草を吸う女性を嫌がる」ということに情報としての価値を見いだす。そして、A の表情から非難という伝達の振る舞いを読み取るのである。しかしながら、A の発話に対する B の理解が如何なるものであるかは、B の「あら、いけないかしら。」という発言を俟って初めて (A および第三者に) 明らかになるのであり、A は B がこの発言を行うまで、自分の言葉がどのように理解されたのかを知ることはできない。このようにコミュニケーションにおいては、コミュニケーションに後続するコミュニケーションによって、先行するコミュニケーションが規定されるという関係が生じる。従って、例えば、A の意図に反して、A の発言の後に B が黙って煙草の箱を差し出すときには、B は A が煙草を欲しがっていると A の発話を理解したことになり、A のコミュニケーションもそのように規定されることになるのである。

コミュニケーションとは、こうして、情報、伝達、理解の統一体 (Einheit) として説明可能なものとなる。しかしコミュニケーションがこうした三つの選択からなる統一体と見なされるためには、コミュニケーションがオートポイエシス (Autopoiesis) を行うシステムの要素として機能しなければならない、とルーマンは言う。だが、このことは如何なる事態を指しているのだろうか。

4. コミュニケーションのオートポイエシス・システム

オートポイエシスとは、「システムを構成するすべての要素的単位を、まさにこの要素のネットワークを通じて再生産し、そのことによって環境

と一線を画しているようなシステム」(Luhmann [1986: 266]) に関する概念である。別の言い方をすれば、オートポイエシス・システムとは、自己組織システム、つまり自ら構造を作り出し変化させるシステムであるばかりでなく、自分自身の要素やシステム境界をも自ら作り出すようなシステムのことなのである。そして、ここでいう要素とは、システムにとってそれ以上分解できないような単位 (Einheit) としてはたらくものを指している。例えば、社会システムにとっての要素は、コミュニケーションである。オートポイエシス概念にとって重要なのは、こういった要素とシステムとの関係である。なぜなら、「要素は、それを単位として使用するシステムにとってのみ要素なのであり、このようなシステムを通じてのみ要素となる」(SS. 43) からである。簡潔に言うと、オートポイエシスとは、こういったシステムが要素を再生産する仕方を指示する概念であると言えよう。

一方、「自己準拠という概念は、要素、過程、システムそれ自体の統一性を意味している」(SS. 58) とルーマンは定義する⁽⁴⁾。ルーマンによれば、ここでいう「それ自体」(Für sich selbst) とは、他による観察の様式から独立に、ということに他ならない (SS. 58)。先に述べたように要素のレベルでは、コミュニケーションは接続するコミュニケーションにおける観察を通して進行する、自分自身への再帰的な関係を通じて成立するのであった (基底的自己準拠)。けれども、このように自己準拠する要素はシステムに属する場合にのみ要素としての意味をもつのであり (オートポイエシス)、要素の自己準拠にはシステムの統一性が前提されなければならない。そこで、システム次元の自己準拠に目を移せば、自己準拠システムとは、「システムを構成する要素を機能的単位として自分自身で構成し、このような要素の間のあらゆる関係において、こうした自己構成への指示を随伴させ、このような方法で自己構成を持続的に再生産する」(SS. 59) ようなシステムだということになる。

もっと詳しく自己準拠システムを見ていくためには、観察という概念を

検討しなければならない。ルーマンによれば、観察とは、区別の操作に他ならない。すなわち、観察という概念は、「区別された側の一方、もしくは他方を指示するために区別を使用する操作」(Luhmann [1986: 266])を意味するのである。ルーマンの先の定義に従えば、自己準拠は、他による観察の様式から独立なものでなければならなかった。それゆえ、自己準拠システムは自ら観察を行わなければならないのである。これが自己観察である。ルーマンによると、「自己観察とは、システム/環境の差異を、まさにその図式によって構成されるシステムのうちに導入すること」(SS. 63)を意味する。そして、この自己観察がオートポイエシス・システムの維持にとって必要不可欠の契機をなすのである。なぜなら、「要素の再生産において、それは他の何かとしてではなく、システムの要素として、再生産されることが確保されねばならない」(SS. 63)からであり、そのためにはシステムのうちにシステム/環境という区別を持込み、そのうちの一方(＝システム)を指示する操作が必要となるからである。

コミュニケーションに話を戻してこのことを説明してゆこう。先程来、コミュニケーションは社会システムの要素であると述べてきた。だが、この言い方は正確に言うと、正しくない。社会システムの要素としては扱いにくい性質が、コミュニケーションには存在するからである。第一に、コミュニケーションは直接的に観察されるものではなく、単に推定し得るのみだということが問題となる。コミュニケーションは、分析(これ自体がコミュニケーションである)によって無限に分割されうるために、どのレベルで成立したと見なすかは推定に依存することになって、直接的な観察には馴染まないのである。次に、コミュニケーションは対称的であるということが問題になる。例えば、コミュニケーションの送り手のとったある伝達態度ではコミュニケーションの受け手には理解が生じなかったという事態を考えてみよう。この事態では、コミュニケーションの受け手の側の態度を伝達態度として、コミュニケーションの送り手が「彼は何も理解し

ていない」という情報を得るといような反対の流れも同時に生じうる。つまり、送り手と受け手の間にはこの意味で対称的な関係が存在するのである。この対称性により、コミュニケーションを送り手から受け手へと一方向的に伝達される固定的要素として扱うことが難しくなってしまうのである。

こういったコミュニケーションのもつ性質に対処するためには、コミュニケーションを行為に変換した上で、それを社会システムの要素としなければならない。なぜならば、行為は直接的に観察可能であり、コミュニケーションよりずっと扱いやすいからである。さらに、「行為の理解をコミュニケーションの生起に組み込むことによって初めて、コミュニケーションが非対称化され、そのことによって初めて、コミュニケーションは伝達者から伝達の受け手への方向性を獲得する」⁽⁶⁾ (SS. 227) からでもある。

コミュニケーションの行為への変換過程は、帰属 (Zurechnung) の過程である。このことは、一般に、帰属のルールに従って、コミュニケーションの伝達態度をある行為としてある人物に帰属させる過程を意味している⁽⁶⁾。多くの行為は状況に帰属させたほうが予測しやすいにもかかわらず、「日常的には、行為は個々人に帰属される」(SS. 229) のである。こうして、コミュニケーションの伝達態度は誰かに帰属される行為として解釈され、この行為がシステムの再生産に必要な構成要素となるのである。注意しなければならないのは、この行為を帰属させる規則自体が、システムに属するものと見なされることである (SS. 247)。このようにして、システムの帰属規則がシステムの要素となる行為をシステムの環境から区別して規定するという意味で、自己観察が生じるのである⁽⁷⁾。

再び、先の例で考えてみよう。A は B の喫煙という伝達の振る舞いを帰属の規則に従って、喫煙行為として B に帰属させている。こうした自己観察による帰属の過程によって、コミュニケーションが行為へと単純化されることになる。また、この単純化がなされることで、B の行動につい

でのコミュニケーション（コミュニケーションのコミュニケーション）をすることが可能となり、A が後続するコミュニケーションを選択することも可能となる。ここから明らかになることは、自己観察を通じて、個々のコミュニケーションがはっきりした輪郭をもち、責任を伴った個々の行為に還元され、それが不可逆的に接続されていくということである。

結局、ルーマンの理論においては、社会システムがそのオートポイエシスを展開するために、コミュニケーションと行為の双方がともに必要とされるのである。この事態は次のように言い換えることもできる。コミュニケーションは社会システムの自己構成の基礎的要素であり、行為は社会システムの自己観察の基礎的要素なのである、と (SS. 241)。コミュニケーションの過程には、自己観察が常につきまとい、帰属の過程を通じてシステムの要素が行為として固定されるのである。ルーマンに言わせれば、「社会システムにおける個々の行為の持続的な産出は、随伴する自己観察の遂行として最もよく把握されうる。自己観察によって、基礎的な単位は、接続行為の支点が生じるように際立たされる」(SS. 229f) ということになる。しかし、明らかにされるべき問題はまだ残っている。すなわち、行為と行為はいかにして接続されるのかという問題はまだ未解決のままなのである。

5. 行為の接続と構造

コミュニケーションをコミュニケーションに繋ぐこと、あるいは行為を他の行為に接続することは、構造の存在を前提にしている。すなわち、「他の準備されている（システムに可能な）可能性を排除することを通じて、次の要素を持続的に規定することは構造から生じる」(SS. 388) のである。要素間の関係づけの可能性を選択的に限定する働きをもつこうした構造は、個々の要素の全ての連関が等確率で生じること（エントロピー）を放棄しなければならない。このことが、要素を自己再生産するための前提になる。ここで注意する必要があるのは、ルーマンの用いる自己再生産の概念が、

同一の要素を反復的に生産することではなく、消滅する要素を他の要素で置き換えること、つまり「接続可能な出来事を絶えず新たに構成すること」(SS. 258)を意味していることである。

そして、このような他の可能性を制限する働きをもつ構造を支えているのが予期 (Erwartung) である。なぜなら、予期も可能性の余地の制限を通じて成立するからである (SS. 397)。ここから、社会システムの構造は予期のうちに存在し、構造とは予期構造のことであるというテーゼが導かれることになる (SS. 398)。けれどもこのテーゼに、構造が全く変化しないということが含意されている訳ではもちろんない。ルーマンによれば、構造は偶然を通じて常に変化の危機にさらされるのである。ここで偶然とは、構造による調整を欠いた出来事のことを意味している (SS. 170)。端的に言ってしまうえば、偶然とは期待外れ (Enttäuschung) に終わった出来事のことなのである⁽⁸⁾。そしてこの偶然を生み出すもとになるのが、ダブル・コンティンジェンシーである。「ダブル・コンティンジェンシーとして経験され、再生産されるものは、常に変化する条件下での時間化された基底的出现事という基礎のもとで、持続的な再生産のために必要となる自由度そのものなのである」(SS. 186)。ダブル・コンティンジェンシー状況では、他我のパースペクティブによる否定の可能性を介して、つねに期待外れの危険が伴っている。従って、ダブル・コンティンジェンシーが自己触媒として働くという先のルーマンの主張は、混沌からの秩序 (order from noise) 形成が常に既に生じていることを意味しているのである。

ここに至って、我々は意味の自己推進過程の議論に再び立ち戻ることが可能になる。つまり、意味を時間的な前－後関係における接続可能な可能性の顕在化の過程として扱うということの内実を理解することができるようになるのである。再び、先の例で見てみよう。この例では喫煙という行為の意味が顕在化しているときには、非難という行為の意味は接続可能な意味 (の一つ) として潜勢化されている。そして、それは後続行為の意味

として初めて顕在的なものとなる。ここで、意味のみに注目すれば、この過程を意味が自身を通じて自分自身を再生産していると見なすことができるのである。

もちろん、意味の自己推進過程は構造が存在しなければ生じない。さらにある行為が理解されないか、拒絶されるときには、このオートポイエシスの過程は停止する。コミュニケーションによるオートポイエシスは、継続するか、停止するかという二つの状態しか選択できないのである。しかしながら、オートポイエシスの過程が停止することは、相互行為の文脈を変えたり、反射的なコミュニケーションを行ったりすることで回避することができる。そのかぎりでは、コミュニケーションのオートポイエシスは決して止むことなく続けられていくのである。

6. 基礎概念の検討

以上で、我々はルーマンの意味とコミュニケーションに関する論述を一通り概観したことになる。従って次に必要となるのは、こういったルーマンの議論のもつ射程を明らかにする作業である。しかし、この作業は別稿に譲り、ここではルーマン理論を評価する前提となる基礎的概念に焦点を絞って検討をくわえることで満足することにしたい。

まず第一に問題にしたいのは、自己準拠という概念である。ルーマンがこの語に託している意味は明らかに多義的であり、このことがルーマンの議論を見えにくいものにしているからである。例えば、意味の自己準拠と基底的自己準拠とでは、全く異なった内容が同一の概念に割り当てられている。即ち、意味の自己準拠はトートロジーを指示しているのに対して、コミュニケーションにおける基底的自己準拠ではコミュニケーションが更なるコミュニケーションによって成立することが述べられているのである。さらに基底的自己準拠のうちでもダブル・コンティンジェンシー状況におけるそれは、自我の行為に対する規定が他我の規定を通じて自我の規定に

回帰する事態を指しており、前二者とは明らかに異なった概念だと見なすことができるものとなっている。

ルーマン自身は、自己準拠概念を整理するため、自己準拠を次のような形で定義している。「自己準拠も厳密な意味で準拠、即ち区別に応じた指示である。この概念領域の特殊性は、指示の操作がそれによって指示されたものに含まれるということにある」(SS. 600)。すなわち、ここで言う自己準拠とは自分自身が属するものを指示することなのである。それゆえ、どのような区別に従って何を「自己」として指示するのかに応じて、自己準拠概念は三つに分類されることになる。まず、要素と関係(状況)という区別を用いる基底的自己準拠。つぎに出来事の前/後という区別を用いる反射性(Reflexivität)。最後に、システム/環境の区別を用いる反射(Reflexion)、がそれである。さらに、ルーマンによると、この意味での自己準拠はトートロジーとは異なる。自己準拠の操作は自分自身を操作として指示する訳ではないからである。あるいはこう言ってもいい。こうした意味での自己準拠は脱トートロジー化されている、と(ルーマンはこうした事態を付随的自己準拠(Mitlaufende Selbstreferenz)と呼んでいる(SS. 604))。

こういったルーマンの説明に従うとき、我々が見てきた自己準拠概念のうちでこの定義に当てはまるのは、コミュニケーションにおける基底的自己準拠と自己観察によるシステムの自己準拠のみだということになる。自己準拠にトートロジーが含意されていないことから、ここでの自己準拠概念から意味の自己準拠が除外されることは明らかである。さらに、ダブル・コンティンジェンシー状況における基底的自己準拠は、煎じ詰めれば予期の予期のことであり、「行為は他我のパースペクティブを通じてコントロールされる」(SS. 183)ということを表しているに過ぎず、先の定義に抵触してしまうことになる。好意的に解釈すれば、これは(基底的)自己言及であり、言及される「自己」は行為であると見なすこともできよう。

しかし、こういった用語法の不統一は混乱を招くばかりである。

コミュニケーションにおける基底的自己準拠を考えてみよう。ルーマンによれば、これはコミュニケーションが更なるコミュニケーションによって成立することを意味するのであった。つまり、コミュニケーションを確定するのもコミュニケーションであるという訳である。そして必要とあらば、理解を通じてコミュニケーションが成立したか否かについてのコミュニケーションを行うことも可能になる。このようにして、コミュニケーションによって、コミュニケーションが単なる状況とは区別されるという自己準拠が生じるのである。結局のところ、先程の自己準拠概念にかなっているのは、コミュニケーションのレベルでは、以上のような過程以外ではありえないのである。

第二に、問題にしたいのは自己準拠概念のうちでも第三のもの、すなわち自己観察によるシステムの自己準拠である。自己観察においては、システム/環境の区別をする操作がシステム自体に属することから、これが先の自己準拠の定義にあてはまることは明らかである。そこで、この操作を更に詳しく見てゆこう。ルーマンによれば、自己観察とは、システム/環境の区別をシステムのうちに持ち込むことで、コミュニケーションをある行為としてある人物に帰属させる過程を意味するのであった。従って、この過程には、①コミュニケーションをある人物に属するある行為に変換する操作と、②この行為をシステムに属するものとする操作、という二重の操作が含まれていることになる。もちろん、この二つの操作は独立に扱えるものではなく、相互に分かちがたく結びついている。しかしながら、この二つの操作を分けて考えることにより、我々はパラドックスの二つのあり方を明らかにし、機能的分析に適した準拠問題を見いだすことができるのである。

ここで、次のような相互行為システムの例を考えることにしよう。それは、「紳士的なものについて」というテーマをめぐって、コミュニケーション

ンを行っている複数の人々からなる相互行為システムである（パーティーなどに集まった人々を思い浮かべると判りやすい）。ルーマンによれば、こうしたテーマはコミュニケーション過程の構造として役立つものである（SS. 216）。そこでは、このテーマに沿わない話題は極力排除されるか、話題に登ったとしても無視されることになる。従って、この相互行為システムのシステム/環境の区別は、ある人の述べること（これをルーマンは貢献と呼ぶ）が紳士的である/紳士的でないという区別に対応することになる。

さて、このシステムの内部で、「紳士的であると判断を下すこと自体はある人に属する行為なのだろうか」という問いを発することができる。これは自己観察のうちの①の操作に対応してつくられた問いである。我々はこれを一見自明な問いのように思う。しかし、この問いは、「紳士的であると判断を下すことをある人に属する行為として判断を下すこと自体はある人に属する行為なのだろうか」という形で無限後退を導いてしまうのである。確かにここには、決定不可能な決定が存在していると言える（Luhmann [1990a: 8]）。しかし、システムはこのパラドックスを自ら脱パラドックス化しなければならない。そうでないと相互行為システムのオートポイエシスが停止してしまうからである。そして、この脱パラドックス化は論理的にではなく（それは不可能である!）、経験的に行われる。多少とも考えてみれば、実際の相互行為システムがこのパラドックスのためにオートポイエシスを停止することは有り得ないことがわかる。この様な自明の問いを発することは、馬鹿らしいこととして通常は無視されてしまうからである。換言すれば、こうした帰属規則自体の帰属を問題にすることから生じるパラドックスは、帰属規則を歴史的に蓄積し、間主観化することによって回避されているのである。つまり、論理的には可能な帰属の無限後退は、帰属規則の間主観化という事実につき当たることで、経験的にその後退をやめるのである。

同じように、この相互行為システム内部で、「あるものを紳士的であるとする行為自体は紳士的であるのか」という問いを発することもできる。勿論、これは自己観察のうちの②の操作に対応してつくられた問いである。この問いに、「あるものを紳士的であるとする行為は紳士的である」と答えればトートロジーが生じることになり、「あるものを紳士的であるとする行為は紳士的でない」と答えればパラドックスが生じる。トートロジーは、システムと環境の区別を抹消することで自己観察を行うことを不可能にするのに対して、パラドックスは決定不能状態を作り出すことで、自己観察を停止させてしまう。いずれにせよ、この問いが発せられることにより、相互行為システムのオートポイエシスのコミュニケーションの連鎖は途絶えることになる。

この問いは、どんなシステムにも潜んでいるものであり、一度顕在化すると、システムの存続を経験的にも危機に陥れるという意味で、先の問いよりも非常に強力なものである。そこで、このパラドックス⁽⁹⁾は慎重に脱パラドックス化されねばならない。すなわち、このパラドックスはシステム内では不可視にされるとともに、不可視にされたこと自体も不可視にされるのである。それゆえ、システム内在的な視点にとどまる限り、このパラドックスを観察することは、論理的にはともかく、経験的にはできなくなる。あるいはこれを、自己観察の自己観察が固く禁じられると言い換えることもできよう。なぜなら、今の例から明らかなように、自己観察の自己観察はシステムのオートポイエシスを停止させてしまうからである。

従って、自己準拠システムが孕むパラドックスは他者観察 (Fremdbeobachtung) に委ねられねばならない⁽¹⁰⁾。つまり、このパラドックスは他のシステムによって観察されねばならないのである。そして、こういった観察により、システムがいかにして脱パラドックス化を行っているのかが明らかになるのである。例えば、紳士的であることが「価値」として人々に承認されることが、自己観察の自己観察を禁じる脱パラドックス化として

働いているといったように。

オートポイエシス・システムはいかなる戦略のもとに脱パラドックス化を行っているのか。これは機能的分析のための準拠問題として十分に役立つ問いである⁽¹¹⁾。従って、これを様々なコミュニケーション・システムにおいて明らかにする作業を行うこと、これがルーマン理論から引き出すことのできる社会分析の一つの方向性である。そして、機能的に分化したシステムがオートポイエシス・システムであるかぎり、この準拠問題は様々な理論的領域を比較する視点の役割をも果たしうる。我々はこのことを確認して、ひとまずこの論稿を閉じることにはしたい。

註

- (1) このような試みとして、ハーバーマスのコミュニケーション的行為の理論や、ギデنزの構造化理論における「行為主体の成層モデル」を容易に思い浮かべることができる。(→Habermas [1981=1985, 1986, 1987], Giddens [1979] [1984].)
- (2) 以下、本文における Luhmann の *Soziale Systeme* からの引用及び論拠となる箇所の表記は、括弧内に SS. という略号と該当ページ数を記すことにより表すことにする。
- (3) ルーマンは、Mitteilung を utterance と英訳しているが、Mitteilung というドイツ語がもつニュアンスは翻訳不能であると述べている (→Luhmann [1990a: 17]).
- (4) この論文では、過程の自己準拠については扱わない。これによって意味されているのは、コミュニケーションについてのコミュニケーション、権力に対する権力の行使といった同一の過程が再帰的に適用される反射性のメカニズムでしかないからである。
- (5) この方向性を逆転させようと思えば、伝達の受け手の側が何かを伝達すること、つまり何らかの行為を行うことによるしかない。
- (6) この考え方は、廣松の四肢的構造論を想起させるが、廣松が認識論的であるのに対して、ルーマンは実践論的であるということが出来る (→廣松 [1982]).
- (7) 従って、自己観察の主体はシステムだということになる。ルーマンによれば、行為主体 (心理システム) による観察ですら他者観察なのである (→SS. 247 f). さらに、田中 [1990: 51] が主張するように、自己観察とは心理システムに

よる観察をコミュニケーションへと変換することではないことも判る。むしろ、自己観察自体がコミュニケーションなのである (→SS. 618)。

- (8) 期待外れに対して、予期をそのまま維持するか、学習によって予期を変更させるかは、それが規範的予期であるか、認知的予期であるかに依存する。従って、偶然によって常に構造が変化するわけではない (→Luhmann [1972=1977])。
- (9) ルーマントはトートロジーをパラドックスの特殊事例であると考えている (Luhmann [1990a: 136])。
- (10) 他者観察は、自己準拠の自然的/人工的制限の区別により、パラドックスを回避することができる (Luhmann [1986: 55])。
- (11) 準拠問題については、Luhmann [1970] の第一論文、「機能と因果性」を参照。

参 考 文 献

- Austin, J. L. 1960 *How to Do things with Words*, Oxford University Press.
=1978 坂本百大訳『言語と行為』大修館。
- 馬場靖雄 1988 「ルーマンの変貌——社会学的オートノミーの原理のために——」
『社会学評論』153。
- 1990a 「コミュニケーションの「可能性」」『ソシオロジ』107。
- 1990b 「批判としてのメディア論——跳び越えられた差異——」土方 透
編『ルーマン/来るべき知』勁草書房。
- Giddens, A. 1979 *Central Problems in Social Theory*, University of California Press.
- 1984 *The Constitution of Society: Outline of the Theory of Structuration*, Polity Press.
- Habermas, J./Luhmann, N. 1971 *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie*, Suhrkamp.
- Habermas, J. 1981 *Theorie des kommunikativen Handelns*, Band I, 2, 3, Suhrkamp.
- =1985, 1986, 1987 河上, 平井, 徳永他訳『コミュニケーション的行為の理論』
上, 中, 下, 未来社。
- Haferkamp, H./Schmid, M. (hrsg.) 1987 *Sinn, Kommunikation und soziale Differenzierung*, Suhrkamp.
- 橋爪大三郎 1985 『言語ゲームと社会理論』勁草書房。

- 廣松 渉 1979 『もの・こと・ことば』勁草書房.
 ——— 1982 『存在と意味』岩波書店.
 今田高俊 1986 『自己組織性——社会理論の復活——』創文社.
 Kiss, G. 1986 *Grundzüge und Entwicklung der Luhmannschen Systemtheorie*, Stuttgart.
 Luhmann, N. 1970 *Soziologische Aufklärung 1*, Westdeutscher Verlag.
 ——— 1972 *Rechtssoziologie*, Rowohlt Taschenbuch Verlag.
 =1977 村上淳一・六本佳平訳『法社会学』岩波書店.
 ——— 1974 *Soziologische Aufklärung 2*, Westdeutscher Verlag.
 ——— 1976 “Generalized Media and the Problem of Contingency”, in Loubser/Baum/Lidz (eds.), *Explanations in General Theory in Social Science*, vol. 2, Free Press.
 ——— 1981 *Soziologische Aufklärung 3*, Westdeutscher Verlag.
 ——— 1984 *Soziale Systeme*, Suhrkamp.
 ——— 1986 *Ökologische Kommunikation*, Westdeutscher Verlag.
 ——— 1987 *Soziologische Aufklärung 4*, Westdeutscher Verlag.
 ——— 1990a *Essays on Self-Reference*, Columbia University Press.
 ——— 1990b *Soziologische Aufklärung 5*, Westdeutscher Verlag.
 Maturana, H./Varela, F. 1984 *El Árbol del Conocimiento*, Editorial Universitaria.
 =1987 管啓次郎訳『知恵の樹』朝日出版社.
 西阪 仰 1984 「意味・行為・行為の連鎖」『社会学評論』143.
 ——— 1988 「行為出来事の相互行為的構成」『社会学評論』154.
 ——— 1990 「コミュニケーションのパラドクス」土方 透編『ルーマン/来るべき知』勁草書房.
 大庭 健 1989 『他者とは誰のことか』勁草書房.
 ——— 1991 『権力とはどんな力か』勁草書房.
 大沢真幸 1988a 『行為の代数学』青土社.
 ——— 1988b 「意味と他者性」『現代思想』16-1.
 ——— 1990 「意味の社会的次元—意味の理論はいかなる必然性のもとで社会の理論でもあるのか?」『理論と方法』Vol. 5.
 Parsons, T/Shils, E. (eds.) 1951 *Toward a General Theory of Action*, Harvard University Press.
 佐久間政広 1990 「社会システムのオートポイエシスとコミュニケーション」『社会学研究』56.

Searle, J. 1969 *Speech Acts*, Cambridge University Press.

=1986 坂本百大・土屋 俊訳『言語行為』勁草書房.

Spenser-Brown 1968 *Law of Form*, E. P. Dutton.

=1987 大沢・宮台訳『形式の法則』朝日出版社.

田中耕一 1990 「不確定性の生成と処理——自己組織的意味構成のメカニズム——」土方 透編『ルーマン/来るべき知』勁草書房.

山口節郎 1982 『社会と意味』勁草書房.

吉沢夏子 1986 「不可逆性のメタファー——ルーマン理論における時間生成のメカニズム——」『ソシオロギス』10.

——— 1988 「観察と他者性」『哲学』86.